

「希楽 與家 の 恢輝譚(かいきたん)」

魔性/ALL

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

### 希望と絶望

たとえ一筋の光を求めても、全てが押しつぶされる世界。助けを求めても、感情や欲望一つで人々が捨てられる世界。

そんな世界の中、彼は手を差し伸べようとする。助けられるものは助けたいという自分勝手な理由を以って。救えるものは救いたいと願って。

貴方には、そんな彼の行先を見届けて欲しい。

—— 彼が歩むこの世界を。

新しくIFルートを作りました。

<https://syosetu.org/novel/1995>

36 /

タイトル絵となっております

主人公の絵となります

目次

黄金色の闇〜前編〜	1
黄金色の闇〜中編〜	16
黄金色の闇〜後編〜	22
黄金色の闇〜END〜	32
赤い悪魔のmurderhell①	44
赤い悪魔のmurderhell②	56
赤い悪魔のmurderhell③	64

## 黄金色の闇〜前編〜

「あべこべ」とは、即ち物事が逆転していることである。そして今から話していくのは物事の逆転ではなく、その世界にある概念の常識が反転してしまっている世界の話

本来ならもう少し世界の住民が「幸せ」で居られたはずの救いが薄い世界の話

—— 貴方はみんなの「希望」になれますか？

—— 第1話 希<sup>キラクミク</sup>樂<sup>ク</sup>與<sup>ク</sup>家 と名乗る人 ——

自分は意識を取り戻す

ここはどこなのだろうか全く検討がつかない場所。

真つ暗の中音だけがずっと木霊していて、水の滴る音が聞こえる。ただ、目も見えなく声も出ないし体も動かない。だが、自分の名前などは覚えているということは記憶に障害はないようだ。体の痛みなどはない。

静けさの不安を抑えるため、考えを構築する

音だけならここは自分の家ではない。これは間違いなく外にいる。しかし、記憶が正しければ自分が外に出た覚えはない。

だが、今の現状からどうすることもできない。何故ここまで体が動かないのも不思議だ。自身がいる場所の推定位置は、芝生に近いもの、そして水の音が近いため、川か海とかだろうか。

待っていても仕方ないと思うが、これ以上出来ることが無いことも事実。今はこの時間をゆつくりとすごして行こう

ガサガサ…

と、思った矢先に何か音が聞こえる。草木を掻き分ける音

「男性…？」

「…ツンツン」

それ口で言うのか。

音がなつてすこし経ったあと、女の子のような声の子にいきなり身体をつつかれた。誰なのかは分からない、そして足音もしなかった

もしや、幽霊の類が自分に悪戯でもしているんだろうか。それなら自分は死人ということになるが、息も心臓も体温も問題がないように感じる。自分の感覚と実際に違いがあるとするとするなら、全くもって意味は無いのだろうか

「…死んでる？」

生きていると伝えたい。初めて人に会ったのだから生き延びるためにも会話をしておきたい。

もし、できることなら目を開けるものなら開きたい。今自身の全力を尽くして、身体を揺する事ができるかどうか試す。

！

「生きているの…？」

彼女は自分に反応を示す。

身体が動いたようだ

「でも」

彼女の声は震えていた。なぜ震えているのかは、分からない。原因が何かしらあるのだろうか、声をかけるにも身体が動かず声も出ない。

もしかしたら過去に何かあったのだろうか。

「怖いけど、頑張らなきゃ」

その少女が放った声には諦めと、期待を入り混じり合わせたような響きを含ませていた。

そして、そのあと私は少女に持ち上げられたのかはまだ知らない、最後にわかったのは身体が宙に浮く感触と何故かザラザラした腕の

ような何かで運ばれるのを感じて、自分は暗い闇に吸い込まれるように意識を閉じた。

一般的な人間は人が道端で倒れていたら、助けようとする。それは偽善であつても善意の心が一般的に人々は強いからだ。そして善意があれば助けた後のことなど、考えたりはしないだろう。

本来ならば

だけど、彼女は善意の気持ちを持って助けたようには感じない。どちらかといえば「恐怖」に似たようなものを感じ取る。彼女は何に對し、何に怯え、何をそこまで震えてまでも助けたのか。

自分には分からない。

彼女に運ばれたと思われる場所から少し時間が経つ。目も身体も少し良くなっていた。彼女の姿はないが、見渡すと自分の下には布団が敷いてあるだけのすこし寂しい場所。周りはかなり狭く、ボロ屋をイメージさせる。もし声の主の彼女が住む場所というには少なくともここは住めるような環境が整った所ではない。

ただ自分は助けてもらった身。家だとするなら今だけなら居候だ。周りには何も無い事が分かっていたとしても、動き回るのは中々に失礼である。それに、本人が帰ってくるかもしれない。大人しく待つているとしよう

足音が聞こえる

これは間違はなくこちらに近づいている

帰ってきたみたいだ

数分後。

彼女らしき人の足音が近づいて来ていることに気がついた。

外の景色は殆ど草木しかみえなかつたため、音も少なく虫の鳴き声くらいしか無かつた。だからこそ、足音ははっきりと捉える事ができる。

「！」

彼女はこちらに気付いた。

自分は足音が止まった事に気付くと同時に、彼女の姿をしつかりと確認する。

そして知る。

—— あれは、ルーミア？

—— だけど、あれはゲームのキャラクターだった筈。

—— どういうことだ？

混乱。

助けてくれた恩人。それは紛れもなく、自分が知っているゲームのキャラクター。だけど、ゲームのキャラクターが目の前にいるというのは一体どういうことなのだろう。

自分は夢を見ているのだろうか？

混乱と焦りを入り混じった表情。普通ならコスプレと思うのが正常な判断、だが昨日の自分の行動、そして今いる場所を考えたとして、そんな正常な判断など今の自分にできるはずもなかった。

だが、本当に彼女がルーミアだとするならば、明らかにおかしな点がある。

—— それは、彼女の周りに巻かれている「包帯」だ

もし自分が知っているルーミアなら妖怪という設定で、人間より圧倒的に力が強い筈。包帯でぐるぐる巻きにする程の傷を負わせる相手と戦ったとしても、明らかにおかしな量。

少女達限定ではあるが「弾幕ごっこ」という遊びでここまで傷付くことはあり得ない。弾幕にもしも殺傷能力があったとしても、痣や切り傷を隠し切れないほどまでの威力があるのだろうか？

そして、妖夢や咲夜がルーミアに対して剣のような弾幕やナイフを投げてまで、ここまで傷つけるようなことを彼女はしたのだろうか？

—— それは有り得ない

これは自分の勘でしかないが、彼女達はそこまで殺伐とした空気にはプライド踏みにじったり、主人を侮辱したりしなればそこまでするような性格では無かった筈だ。今のルーミアを見る限りそんな性格には到底思えない。



それに、鈍器で殴られた所で心当たりがあるのは鬼だが、ここまで一方的に殴られることはまず有り得ない。地底に住んでいる彼等はまず地上に来ることは禁じられている上、鬼で来るとしたら萃香くらいなもの。誇り高き彼女がそんなことをするとも思えない。

——ならばこの傷は一体なんだ？

長考していた自分に不思議と思ったのか彼女は。

「えっと。大丈夫？」

距離を置き、心配した声色で自分に向けて言葉を発していた。その目は、今だに恐怖を含ませていることに自分は薄々気付く。

「あ、はい。大丈夫ですよ」

「そう」

彼女が逃げ腰の理由。

もしかしたら、自分自身に原因があるのではなく、自分の性別に問題があると考ええる。

「私は、命の恩人である貴女に危害を加えたりなどしたりしません。その逆、お礼がしたいのです」

「……！」

「信じてもらえなくても大丈夫です。そこから構いませぬので、私と会話をして頂けませんか？　ここがどこか私には分からないのです」

彼女は緩い表情を見せコクリと頷く。

黒いスカートと、赤いスカーフを身につけた容姿端麗でどこかおとなげな性格を隠している可愛らしい彼女。自分がいた世界なら普通に世界に共通するほどの美しい女の子。

この子をここまで変えてしまった原因は何なのだろう。そして、性別だけなんだろうか。

「えっと、初めまして。私は希楽。與家といいます。くみやと読み間違えるのですが、みくやと呼んでください」

「私は、ルーミアです」

「ルーミアさんですね。分かりました」

——明らかにおかしい挙動。

まるで、肉食獣に喰われかけている小動物のような動作。

急で強引だが嫌われる覚悟をしてでも距離を詰めたい。

それこそ、避けられ交友関係が破綻するかも知れないが、少しでも話をしなければ前に進むにも前に進めない。

「急で申し訳ない。あまり天気もよくありませんので、せめて中に入ってお話でもどうでしょうか？」

「いやだ。怖い。あとさつきと言ってることが違う」

「まあそれはそうなんです、でももし仮に私が貴女に暴力を振るっただとして、雨にうたれ体力が無い方が辛いのでは？」

「……」

彼女は黙り込む。

こちらに引き寄せるような発言。警戒していると知っていてこれはダメだったか。

それなら自分が外来人であることを伝えよう。これ以上警戒を強めても手の内を隠しても意味がないように感じる。

「なら、せめて答えてください。貴女は一体どこから来たの？」

「……私は、この世界の外から来たと言った方が正しい人間かと」

「まさか。外来人なんですか？」

「この人から言わせたらそうなります」

「じゃあ、なぜ貴方はここを知っているの？」

「それを話すには色々と時間がかかるかと、思われます。なので」

「お願い。話してください」

外来人。

やはり途端食い付いてきた。これだけで里の人間と関係が友好でないことがでなんとなくながわかる。人間と上手くいつているのなら、外来人ではない里の人間だと思っていた自分と外来人と知った自分に対しての行動が明らかに違う。

まるで本当に助けを求めているかのよう

「……なら、貴方はこの外からきて私達のことはゲームのキャラク

ターでそれで知っている。ということですか？」

「はい。そうなりますね」

「そして私。いや、私達の元々の性格や能力まで知っているですか、少し信じられないです……」

「それはそうだと思いますよ。私だってそんなこと言われたら（頭大丈夫ですか？）って聞きたくなりますからね」

「それは、言い過ぎですよ。」

幼き彼女はそう言っただけで乾いた笑いを零す。外来人であると言った時から変わったと思ったが、ここまで変わるとは思わなかったため、少し安心と嬉しさが胸にある。

口調や性格など今のルーミアはゲームのキャラだと全然別物だが、やっぱりルーミアは元氣いっぱい、でチルノや大妖精と一緒に遊んでいる姿がどのルーミアでもよく似合うと思う。

「だからこそ」

「知っているからこそ」

「微笑んでくれましたね。やっ」と

「ごめんなさい」

「いやいや、謝らないでください。私はルーミアさんが微笑んで笑っている姿はとても好きですよ。」

「嬉、しいです」

「治してあげたい」

この性格を元の性格に戻すにはどれだけの時間を使うか。まだ彼女に何があったのかすらまだ聞いていない。自分の過去のことを少しだけ伝え、ゲームのキャラでの性格をあくまで設定のキャラとして教えただけだ。

だが、すこし変わってくれたとはいえないきなり彼女の心に土足で入っても良いのだろうか。先程は場所と彼女の心配という言い方もできたが、今回は気になったからとしか言いようがない。

とはいえ、包帯巻いていてその上隠し切れないほどの傷を見て、何も言わずつてのも自分にとっては凄く嫌である。

目は死に夢も希望も全てを諦め、泣き叫んだ目。でも、自分は心理

の資格など持つてはいない。それでもわかるこの目はまだ私を信じ  
ていない。いや、信じたくても信じ切れしていないんだと。

だとしたら

どうしたら手を伸ばせてあげられる？

どうしたら笑顔で居てくれる？

どうしたら……

ルーミアを救ってあげられる？

先程から彼女は自分から話しかけたら返してくれる。だが、彼女か  
ら話しかけてくることはなかった。

ずっと無言。

笑顔も薄い。

ただ一刻と時間だけが過ぎて行く。

精神的に重症であると自分にはわかった

今日だけで色々とあり、自分も疲れた。いきなり目を覚ましたと  
思ったら目が開かなかつたり、体動かなかつたり、治ったと思つたら  
本当の意味で闇を抱えているゲームのキャラクターのルーミアに出  
会った。

本当、全部ゲームとか夢のような出来事。

だけど彼女に運ばれて、空気や傷とかを見てみるとどうにも夢には  
思えない。悪夢と仮定するなら自分にこんなトラウマなどはない。  
記憶が間違つてなければそれ以前にそこまで強烈な事はおきていな  
い。それに、これを夢と捉えるならこの夢は色々で過ぎている。

でも、良心が今の自分にはある。偽善者と言われようが、彼女が自  
分自身で本当に納得できる道を見つけ支えてあげたい。

世間には「誰かの為に自分の命を捧げても守り抜いてみせる」とい  
う言葉がある。

だけど、自分はその言葉は大嫌いだ。なぜなら命をかけて守つたと  
しても、守つた後の人物のことを考えていない。逆にその人物悲しむ  
ことを考えていない事が多いからだ。

死人は語らぬ。

だからこそ、この殺伐とした幻想郷で自分は生きて、生きて、生き抜いてみせる。

月夜。

蛍の光が周り一面を照らしてくれている。その光景は前自分がいた場所では見られることがなかった、自然の光景。少なくとも自分は見惚れていた。

「蛍とか、興味がありませんか、？」

「あ、いや、外の世界だとこんな景色を見られる事が少なかつたので新鮮で見惚れてました」

「そうなんですネ」

彼女は傷や、体調の話などはまだしていない。話したくないのもあるのだろうが、やっぱり気にしてしまう。

でも傷は先程よりは治っているように感じた。常闇の妖怪なだけあって、夜になると調子が良くなるのだろうか。こころなしか彼女の顔には少し元気が出てきているように感じる。

会話を弾ませるのは苦手だ。話し上手でありたかつたとは思う。

「ごはんとか、お風呂とか用意できなくてごめんなさい」

「いえいえ、大丈夫ですよ。助けて貰ってそこまで要求する程恩知らずではないです」

「でも」

「かと言って、着れる服これしかないですし。今日一日はこれで大丈夫です。ご飯も今あまりお腹は空いていないので」

「……」

少し言葉を間違えたのか、彼女は考え込んでしまった。やはり、少し勉強をしておくべきだったか。

「……」

「はい、？」

「なんで、貴方は私を殴らないの」

この言葉。

暴力を振るつた人物が彼女には沢山いたんだろう。彼女ひとり

は限らないが、殴られるのが当たり前に感じるまで少なくとも彼女は殴られたのだ。

——いかり 憤怒

許せないと思った。だが本来なら自分は関係の無い話。聞こえないふりを通せば彼女はそれで塞ぎこむことになるかもしれない。

自分はそれが正解とは思わない。助けられる人は助けたいって自分は思うからだ。

——だから私は。

「殴手つてどうにかを伸なるんですぼか？」

助けを求めている言葉を発したわけじゃない。本当にそうかどうかも分からない。でも、やっと自分は彼女に助けの言葉を発してあげられた。

支えてあげたい。

偽善者など言われてもいい。

では何故そう思ったのか？

それは「納得は最優先」という言葉に従ったからである。彼女を助けたいと思ったのも、笑わせたいと思ったのも、私がそれがいいと思いい、一番納得できる答えだと感じたからだ。

後は彼女の問題。

本当はどうしたいのか、これからどうしていききたいのか、決めるのは自分ではなく彼女自身。

だからこそ、これから何が起きるかなんとなくだが、わかってしま  
う。

「私を殴つてよ……叩いてよ！」

「殴る必要も叩く必要もありません」

「なんで……なんで！　なんで!!」

彼女はずっと半狂乱だ。多分自分が外来人であることがわかっていても、今までのトラウマで恐怖を抑えきれず、爆発したんだろう。

悪いけど、叩くことが正解だと思わないんだ。

「だって、私は……醜い……」

「……」

「何をしても、嫌がられる……」

「怖い……怖いよ……」

「私はなんにもしていないのに。ただ助けただけなのに！」  
「やっとな知れた彼女の本心。醜い美しいで人に暴力などを振るいそれがこの世界では許されている事を知った。まだ、男だけとは限られた話ではない。同じ性別でも見下し、暴力を振るう奴もいる。」

「そしてこれが本当なら八雲紫は何をしているのだろうか、この世界では八雲紫は存在していないのか？ 幻想郷を最後の樂園にしようとしていた彼女の存在がないのならば、この世界は一体なんだ？」

「異変に近いものであるのなら、博麗の巫女である霊夢だって動くはず、もしかしたら彼女も被害者なのか？」

「ああ、成る程。」

「——この世界は狂って いるのか。」

「ルーミアさん」

「……」

「何度も何度も私は助けられていると、伝えました。ルーミアさんが居なかつたら私は死んでいたかも知れません。そして、あの時の私には少し意識があつたんです。だから、怖がついていても私を助けてくれたルーミアさんの声が聞こえていたんですよ？ なのに、何故。」

「貴女を殴らなければならぬのですか？」

「私は、必要ないと思います。だって、助けたくれた人に恩を仇で返したくないからです」

「貴女は殴られて、冷静を保っていたんでしょう？ だから、男である私に殴られないことが不安で不安で仕方なかった。違いますか？」

「今までより、一言言葉を発した気がする。わかって欲しいから、気づいて欲しいから。優しさだけをぶつけない。」

「自分で気付くために。」

「でも……でも！」

「でもじゃないんですよ。何でわざわざこんな可愛い子で女の子を殴らなきゃいけないんですか、私は頼まれても絶対にぜーったいに嫌です」

「私はどうしたらいいの……」

「笑えるようになればいいって、思いますよ」

「そんなの無理……」

「何故ですか？」

「男の人は、私を嫌がるから。」

「え？ それでなんで笑えないんです？」

「人里には男や認められた女の人以外は入れない、男の人が人里の権限を全て持っているから私や、私の友達は入れない。入れないから何も買えない、生きていくためにもなんにもできない……そして、たまに外に出てきた人達が私達を殴ったり、蹴ったりしてストレスを解消しにくるの。それが怖くてたまらない……だから、笑うなんて無理……感情なんて無くなつてしまえばいいって」

「だからそんな事を考えてるから笑うのも、嬉しいって思うのも無理だど？」

「うん……」

「……なら。私が貴女をルーミアさんを元氣付けます」

「……え、いきなり何を言って」

「だって、嫌なんですよね？ 笑えないのも楽しめないのも」

「……」

「沈黙は了承ととります。だから、貴女が男が怖いというのなら私が支えてあげたいんです。恩返しと思っていただければ」

「だからって」

「必ず貴女を元の性格に戻してみせます。だから、初めて会ったばかりですけど、どうか私を信じてもらえませんか？」

「ちよつと……ちよつとまってよ」

少し強引にいきすぎたのはわかっている。怒りもまだあるため、焦った自分は彼女の気持ちを知れて嬉しく思っていたのだろう。これ以上はあまり良くない事を知っていても、私は似たような事をしていた気がする。

「……すいません。少し焦りすぎました」

「いやびつくりしたただけだから。けど何故そんなにしようとしてくれ



ているの。？」

「特にこうだと言えることはないですが、やっぱり恩返しのが気持ちが強いからかと」

「そう」

本当は嘘である。

この世界の事を知って、今の自分がどうするかを考えていくこと。ルーミアだけじゃなく、幻想郷の住民がどうなっているか。そのためには、どうしてもルーミアの協力が不可欠になってくるだけだ。助けたいの嘘ではない。

「……ってのは

嘘よね？」

「えつと？」

「これでも私は妖怪だから。何年も生きて、男性の目線とか気にしていたのもあって、なんとなくわかる……」

「……すいません。この世界の事を知るために、協力してもらおうと思っていました」

「信じてもらいたいのか、そうじゃないのかわからない」

「ごめんなさい」

やはり妖怪は妖怪。人間より遥かに生きていて、人間より多くの知識や経験を持ち合わせている。ルーミアでさえ、自分と比べたら何百年単位での違いがあるのかも知れない。そうだとしたら自分は玄孫よりも下になる。

「いや、頭を上げて……下げるのは慣れてるけど下げられるのは慣れてないの……」

「気持ちにそんな事関係ないですよ」

「……」

「なんかよくルーミアさん黙り込みますね」

「誰のせいだと」

「私のせい？」

「……」

「すいません」

怖かった。

目が猫の怒ってる時の目してた。

「でも、ありがとう」

「御礼を言いたいのはこちらですよ」

「いや、貴方は変人だけど、どうしようもない変人だけど、私の気持ち  
を思ってた話を聞いてくれた。だからありがとう」

「へ、変人……でも、たしかに誰かに助けを求めるのには勇気がいりま  
すよね。私でも、助けてって言えません。多分プライドなどが壁を  
作ってしまっているんでしょう。だけど、もしルーミアさんや友達と  
か自分が大切助けられるものが助けられなかった場合は、そっちの方が  
断然辛いです。だから助けを求めたって、悪いことなんて全然な  
い。って私は思ってますね」

「……貴方何歳？」

「え？ 17歳ですけど」

「……強いんだね」

「ルーミアさん程ではないです」

「ううん私は弱い」

「そんなことないですよ」

彼女はここまでずっと精神が壊れる事なく、耐えてきた。本来なら  
もうとつくに壊れ、寝たきりでいてもおかしくない程の惨状を前に。  
壊れないで、ずっと前を見続けていたんだ。

自分に出来る事。

彼女が出来る事。

今やれるべきことはなんなのだろう。今自分がするべきことは、  
ルーミアと話す事だ。ならば、彼女ができることは何だろう。彼女の  
中にある本心で他の人を助ける力を与えることだ。だからこそ、助け  
てって言うてなくても、改めて前を向こうとしている彼女を自分は支  
えていきたい。

「……じゃあ、弱いと思う私がどんなことをしてきたのか、どんなことが  
あったのか話しても大丈夫かな」

「私もルーミアさんからできれば話を聞きたかったので。話していた

「だけるなら嬉しいです」

「ルーミア」

「え、？」

「ルーミアって呼んでくれたらって。あんまりさん付けは慣れていなくて」

「わかった。ルーミア」

「言いたかったこと伝わったみたいで良かった」

「いや、まあなんとなくわかったから。じゃあ、お話ししてるね」「うん」

——彼女の口から物語が始まる。

それは決してハッピーなものではないだろう、だけど今の自分にはとても大切な話。これから進むためにとっても大切に必要なお話。

それは、絶望と希望が与える物語

絶望を前に彼女は何を見たのか。そして絶望を前に彼女はどう行動をしたのだろうか。

——これから私たちは知っていく事になる。

To Be Continued.

## 黄金色の闇〜中編〜

彼女が話したもの。

聞いた自分は、全てに対して怒りを向けることになる。どこまでも自分勝手な人間がいると知ったからだ。

そのルーミアの口から語ったこと。人として許されるべき行為ではないこと。

それは  
遊虐待び

男達は遊びと言って自身の精神ストレス的な快楽発散のためにルーミア以外の少女達も傷つけたと彼女は言った。到底許されるべきではない行為だと自分は思う。

そして、ルーミアは自身の傷を自分に見せてきた。本来ならこんな傷など見せたくないものである。だがルーミアは、それが一番伝わるからと言って大きな傷をなんの理由で傷付けられ、どんな方法で傷付けられたのかを教えてくれた。

聞いているだけで虫唾が走るものばかりだ。

どうしたら顔一つでどこまで人や人格を傷付けられる。危害を加えてる存在なわけではなく、自分達を近くから守ってもらっている存在に。

どこまで狂っているんだ。この世界は。

「… ねえ大丈夫?」

「大丈夫だよ?」

「じゃあ何故そんな顔をずっとしてるの?」

「え、?」

「なんで泣いてるのって聞いているの」

泣いていた?

自分が?

「別にそんな感情もないし、涙も… あれ?」

気が付いたら自身の目の下に水が溜まっていた。もう唇に涙は触れている。

「本当に大丈夫、？」

「ああ、うん。今は大丈夫だから大丈夫」

「意味がわからない……話してる時にいきなり泣いたからビックリした。」

「あはは、ごめん。話聞いてるね」

「……うん」

なんで気付かない内に涙を流していたんだろう。自分が何にもできない存在で、話を聞くことしかできない存在と感じたからだろうか。

情けないなと自分は感じた。

今の自分に出来ることとはなんだろうか。この世界に来てまだまだ分からない事ばかり。知らない事だらけでルーミアに手なんて伸ばせない。いや、伸ばせる訳がないんだ。

——せめて……自分が前に進む意志を見せよう。彼女と一緒に進める努力を、支える努力をしよう。

早朝。

昨日の夜話が終わり、側にあつた砂で汚れた懐中時計で時間を確認したら丑三つ時を回っていた。そのため起きれるかどうか心配だったが、この世界での不安もあるのか早めに目が覚めた。ルーミアはまだ眠っているだろうか。

未だに自分が幻想郷に来たという実感はない。意識を取り戻したと思ったら自分の部屋ではなくどこかの小屋で、ルーミアと出会った。だからまだ自分はどこかで長い夢でも見てるのではないかと考

えてしまう。

——今の自分にわかる事ではないのだろう。

朝食を作る為に準備を進める。失礼だが、ここはボロ屋だ。家具やキッチンなどはない。いつも何を食べているか分からないが、体調不良はここからも来ているのではないだろうかと思う。もしも人里に入れないというのならば、川魚とかもしくは木の実かキノコなどを食しているのだろうか。

川魚とかはまだ探したらどうにかなる。川の音が近いからそのまま離れることはないし、危なくなつたらすぐに戻ればいい。あとはその川魚をどう調理するかだ。調理器具などは無いため、木や石などを使って火を起こすしかないだろう。

——ひとまず考えるより行動だ。

数分後。

・ 凄いい。全くといっていいほど上手くいかない。よく良く考えれば、自分が木と石を使って火を起こしなんてしたことが無い。時間を見ることも叶わなく、そろそろルーミアが起きて要らぬ誤解をうまなにか心配だ。

あと魚なんて取れるもんじゃない。ヌルヌル滑ってそれどころじゃ無かった。

——もちろんその後は成果などはなく。

・ 普通にルーミアの家に帰ってきた。まだ9時頃だろうか、2時間かけて成果なしとはなんとも情けない。次こそは1匹ほど捕まえてみたいものだ。

変な疲れが自身の身体を巡る。ライターなど現代社会にあった物を持ち合わせていれば良かったが、今の自分にそんなものなどはない。逆に要らぬもの砂がついてきた石。

川の水は綺麗だった。透き通り冷たく、匂いなどは全くない。また次の機会には少し飲んでみたいもんだ。

「…玄関で何をしているの?」

中から声が聞こえる。いや、目の前にルーミアが立っていた。

「うおっ!..びっくりした」

「いや、きつきからずつと居たよ?」

気づかなかった。そこまで自分は考え込んでいたのか。

「. というよりなんで足の方とか濡れてるの?」

「これは、ルーミアに川魚とかを渡せれたらと思ったから。全然上手くいかなかったから残念ってことくらいかな」

「そこまでしなくても…」

「ほら、私達って昨日からなんにも食べてないし、かと言ってルーミアを起こしたくなかったから自分のやれることやってね。」

「…」

「あれ? 黙る要素あった?」

「少し黙って」

「えー…」

理不尽である

「私は少しだけなら出来るから、教えるよ」

「それはありがたい。あとは包丁とまな板とかあったら捌けるんだけどね」

「それならあるけど、調理器具って呼べるのはそれくらいしかないよ?」

「まあそうみたいだね」

「ごめんなさい…」

「こんな事で謝らないで頼むから」

まだ一晩話し合った間柄の関係だ。だけど何となくルーミアの性格の一端は分かってきた気がする。それは疑心暗鬼な節があるってことだ。そうでなければ、先程からずつと自分の顔を伺ったりはしないだろう。

それは、昨晚聞いた話から推測が出来ること。わざわざ聞く必要も無い。これからルーミアに信じて貰えるよう自分自身が変わればいだけである。

自分に出来ることはルーミアを知ること。そしてまだ過去に囚われ心を開き切っていないルーミアを支えること。

その為に自分は全ての知恵を振り絞ってでも成功をさせてみせる。

—— どれだけの時間を使っても、絶対に

あれからすぐに川に向かい、川魚を取り始めた。他愛のない話をし  
て、垣間見るルーミアの笑顔に嬉しきを感じながら

「こっちは捕まえたよ」

「OKー自分も何となくだけど捌けたから食べてみよかー」

「一応洗ったし… 大丈夫？」

「元々そこまで汚くなかったし、川の水で洗ったから大丈夫だと思う  
けど…」

これは鮎だろう。作れたのは塩焼きと刺身。鮎は塩焼きで食べる  
のも美味しいが、刺身として食べるのも中々にありだ。これだけ川の  
水が綺麗なら身もしっかりとしている。味は申し分ないと思われる  
がどうだろうか。

「あ、美味しい」

「塩焼きとかでも普通に美味しいけど、こんなのも食感や風味が変  
わっていいと思わない？」

「そう、だね」

ルーミアの頬に一筋の光が見えた。

—— 涙？

「えっ、ちよっつ、大丈夫？」

泣いている。泣いているのに顔は凄く笑顔で。ただ1人の少女の  
笑顔が風景を淡く輝かせている。

「う、うん。大丈夫だよ」

「でもなんか、しょっぱいね…」

自分は黙って彼女を見据えた。笑顔で元々の目の赤さで少し腫れ  
てるくらいしか分からないけど、心から喜びで泣いているんだろう  
と。

友達も今はどうなっているか分からない状態。その不安を1人で  
抱え込み、一人で生きてきた彼女<sup>ルーミア</sup>。

けれどあの瞳に映った世界。それは、前よりずっと希望で満ち溢れ  
ていた——

ルーミアが落ち着いて話せる様になってから数十分後。



昨日のおさらいとして、ルーミアは傷の事を中心に語ってくれた。そして、これから自分達ができる案も出してくれた。

ルーミアと仲良くなれるにはどうすればいいか、それを今一番考える必要だ。それは見ていないルーミアの一面を自分は見て見たいという自分勝手な願望。今の自分にできるルーミアを笑顔にさせる唯一無二の考え方だと信じて。

今はルーミアと一緒にいたい。

そのままルーミアの話は続く。側でずっと聞いていたが、友達とはぐれてしまった話もあった。友達の心配があると思うため、とりあえず友達を探すのが先だろうか。

だがしかし、ルーミアが一緒と言って無闇に動くのも不安である。安全確保の為此の周りの状況を把握し、近くあるという紅魔館にお邪魔するのもありなのかもしれない。

又は博麗神社に行き、この現状がどうなっているか。そして外来人であることを伝えれば、もしかしたら力を貸してくれるかもしれない。記憶に残っている地図のなかではここからだが一番遠い場所なのだが。

それでも出来る限り自分は最善の行動をしたい。いきなり見知らぬ人間が、男が来たら彼女達がどう行動するか不安だからだ。だからなるべく彼女達に会うまでに色々と準備をした方が良さだろう。

今を変えるために。

To be continued...

## 黄金色の闇〜後編〜

あれから一週間が経った。

ルーミアとの会話はとても楽しくて、笑顔が良くて、自分は好きだった。何度も見れたわけじゃないが、それでも見せてくれた笑顔は最高だったんだ。

けれどルーミアは自分に対してどう思っているんだろう。

ルーミアがどう思ってくれてるかなんて、自分には分からない。他人の気持ちなんてわかる訳がない。自分が必要とされているのか。

分からない。

ある日帰り道で男を拾った。

だけど、彼は自身の力では動けないようだ。誰かの救助が必要となる。

・ 私が助けなきゃいけないのか？

彼を放つていれば、動けない状態ならすぐに命を落とすだろう。だが、もしそんなことが人里にバレれば私の命もない。今のわたしには助けることしか残された道はない。

だけど、恐怖

先程からずっとある感情。そして、拭いきれない気持ち。出来ることならすぐにでも逃げ出したい。ああ、どうしてここまで私は神に虐められるんだ。

悲しみに襲われる。助けても、栄養を与えても、姿を見られれば終わりなのだから。それなら、いつそのこと顔を見せて逃した方が楽なのかもしれない。

もし願うことが許されるのならば、彼が心優しい人物である事だ。私にできるのはそれくらいなものでしかない。

時が流れる。

彼は意識を取り戻した。一瞬驚いた表情を見せていたようだが、すぐに普通に戻る。ただ、戻っても何か私を見て考え込んでいた。まだ彼に対して分からない事ばかりだ、私も聞くべきだろう。

「えつと。大丈夫？」

「あ、はい大丈夫ですよ」

「そう」

彼は顔も、雰囲気も、人並みならぬ程良かった。寝ている姿だけでも、それが分かる程に。だからこそ、裏切られる恐怖がある。信用して裏切られるくらいなら、信用なんて最初からしたくない。

男達が嫌い。それは間違っではない。このまわりつく不快感は傷や包帯だけではない別の物も混じっていることは分かる。

—— どうすればいいのか

「私は、命の恩人である貴女に危害を加えたりなどしたりしません。その逆、お礼がしたいのです」

・  
は？

今なんて——

「信じてもらえなくても大丈夫です。そこから構いませんので、私と会話をして頂けませんか？　ここがどこか私には分からないのです」

驚きが隠せない。

いきなり言葉を発した彼、その事に関しても驚きは勿論ある。だが雰囲気は確かに良い人なのも分かる。私にここまで優しくする人は居なかった。

わざわざ少しこちらに近づき、手を伸ばす彼の笑顔はとても眩しい。無論信じてるわけではない。でも、恩返しをしてくれるというなら素直に受け取れば良い。期待は持つだけ損なのだから。

私は頷く、彼の言葉に。

「えっと、初めまして。私は希楽 與家といいます。くみやと読み間違えるのですが、みやと呼んでください」

「私は、ルーミアです」

「ルーミアさんですね。分かりました」

彼はどうやら（みや）と言うらしい。

名前をどんな風に付けられたのか気にはなるけど、いまの私に聞く勇氣はない。また聞ける時があれば聞いておくとしよう。

あれからずっと会話をした。アクシデントもあつたが彼のペースで私は普通に話すことができた。彼が語ったことは彼自身は幻想入りしてきた人だった。だからこの世界を知らない筈なのだが、外のゲームというものに私達が出ているらしく、知識は多少なりともあつたようだ。

なんとも不思議な話だが、私には彼が嘘を付いているようには見えなかった。本心で話しているんだろう。彼は私が微笑んだら一緒に笑ってくれて、私にはそれが嬉しかった  
・  
だけど。

この世界はそんな甘いものではない。私以外に何人も何百人も私とそれ以上の酷い目にあっている人物はいる。

牢屋に入れられ、殴られ、蹴られ、何もかもを奪っていく。そんな存在がこの世界には腐る程いる。そして、それを見逃し笑い者にする存在も。

この世を楽園と誰かがいった。

何が樂園だ。

嘘っぱちだ。

私はそれを

——絶対に許さない。

ずっと考えていたことが彼の存在で暴発してしまう。耐えてきた憎しみを彼にぶつけようとする私を必死に止める。心を塞いでいた私と一緒に笑ってくれた人に、信用なんて関係ない。恩を仇で返したくない、それだけ。

優しい彼には私は何もしたくない。だから一度落ち着こう。

考えを落ち着かせていると、時間がもう夜を回っていた。虫の音が聞こえる。蛍も見えているということはまだもう夏に入ったのだろう。時の流れがたまにわからなくなる時があるが。

彼はずつと、蛍の光に目を向けている。外から来たと言っていた。もしかすると、蛍を見られなくて興味があるのだろう。

「蛍とか、興味がおありなんですか、？」

「あ、いや、外の世界だとこんな景色を見られる事が少なかったので新鮮で見惚れてました」

「そうなんですね」

外でも見られない訳ではないようだ。私にとって普通の光景でも外の世界から来た彼にとってとても記憶に残るものなんだろう。何故だか私も嬉しくなる。

・ 忘れていた。

・ 男性に欠かせぬものが今の私には差し出せない。彼に私は何も出すことが出来ない。

——まずい。

——謝らならないと。

「ごはんとか、お風呂とか用意できなくてごめんなさい」

「いえいえ、大丈夫ですよ。助けて貰ってそこまで要求する程恩知ら



らない、仕方のない事なんだって。だけど、彼は会ってからずっと、こちらの顔を見てくれた。醜い私の笑顔を見て、一緒に笑ってくれた。だから怖いんだ。

失いたくないんだ。

でも、もう心に余裕なんてない。

諦めるしかないのか。

「何で、私を殴らないの」

私は掠れた声で絞り出した声で、そう伝えてた。どうしてか、助けを求める筈のものが、逆に突き放してしまった。

……私が求めたものなのかもしれないというのに。

彼は、言葉を聞いて驚いた様子を示していた。驚きの表情の中に何故か、一瞬、彼に憎しみが生まれていたのが分かってしまう。

彼は考えている。だけど、直ぐに私の目を見て答えを出した。

「殴ってどうにかなるんですか？」

私には、彼の言った言葉には直ぐに理解が追い付かなかった。いや、本当なら分かった筈だったのだろう。彼を見ていれば分かっていた筈なのだから。

だけど、私はそれを信じきれていなかっただ。そして今も、裏切られる事に恐怖している私がいる。

また、心が落ち着かない。

「私を殴ってよ……叩いてよ！」

だけど彼は表情を変えず。

「殴る必要も叩く必要もありません」

そう、言った。

「なんで……なんで！　なんで!!」

分からない。いや、分かっている。そんな考えが、頭の中を巡る。私は、結局どっちなんだ。

もう、抑えきれていない。自身の言葉も感情も制御出来ない。分かるのは、おかしいと思う私だけ。

「だって、私は……醜い……」

「……」

「何をしても、嫌がられる……」

「怖い……怖いよ……」

「私はなんにもしていないのに、ただ助けていただけなのに！」  
彼は黙って聞いていた。まるで、子供をあやすような目でこちらを見ている。だけど、私にはそれが、不愉快とは感じなかった。

話してしまった私には、後のことを考えている時間も余裕もない。考えている彼の返事を、待つことしかできない。情けなくて、苦しくて、涙が出てこない自分を悔やんだ。

そして彼は言葉を発した。

「ルーミアさん」

「……」

「何度も何度も私は助けられていると、伝えました。ルーミアさんが居なかつたら私は死んでいたかも知れません。そして、あの時の私には少し意識があつたんです。だから、怖がついていても私を助けてくれたルーミアさんの声が聞こえていたんですよ？　なのに、何故。」

貴女を殴らなければならぬのですか？」

「私は、必要ないと思います。だって、助けたくれた人に恩を仇で返したくないからです」

「貴女は殴られて、冷静を保っていたんでしょ？　だから、男である私に殴られないことが不安で不安で仕方なかった。違いますか？」

限りなく当てられた私の心。彼は私の気持ちや考えを見据えているのだらう。

それでも。

「でも……でも！」

「でもじゃないんですよ。何でわざわざこんな可愛い子で女の子を殴らなきゃいけないんですか、私は頼まれても絶対にぜーったいに嫌です」

——貴方は

「私はどうしたらいいの……」



「笑えるようになればいいって、思いますよ」

「そんなの無理……」

「何故ですか？」

「男の人は、私を嫌がるから」

「え？ それでなんで笑えないんです？」

「人里には男や認められた女の人以外は入れない、男の人が人里の権限を全て持っているから私や、私の友達は入れない。入れないから何も買えない、生きていくためにもなんにもできない……そして、たまに外に出てきた人達が私達を殴ったり、蹴ったりしてストレスを解消しにくるの。それが怖くてたまらない……だから、笑うなんて無理……感情なんて無くなってしまうばいって」

——何故私の言葉を聞いても。

「だからそんな事を考えてるから笑うのも、嬉しいって思うのも無理だど？」

「うん……」

「——なら。私が貴女をルーミアさんを元気付けます」

「……え、いきなり何を言って」

「だって、嫌なんですよね？ 笑えないのも楽しめないのも」

「……」

「沈黙は了承ととります。だから、貴女が男が怖いというのなら私が支えてあげたいんです。恩返しと思っていただければ」

「だからって」

「必ず貴女を元の性格に戻してみせます。だから、初めて会ったばかりですけど、どうか私を信じてもらえませんか？」

「ちよつと……ちよつとまってよ」

——手を伸ばそうとするの？

彼は私を慰めるようにして、話を聴いてくれた。嘘をついたが、私を傷つけないようにするという理由が彼自身の想いを通して伝わってきたのが分かった。

そして、私の笑った姿を見るという理由で、私にペースを合わせてくれたのだろうか。彼の後ろ姿は喜んでるように思えた。

私の気持ちは整理できていないわけではない。だからといって、彼を心底疑っているわけでもない。ただ彼のペースに巻き込まれると、色々考えていたことが全部梅雨のように消えていく。

ああ、もうなんだか落ち着かない。

彼は不思議で優しい。最初に得た気持ちとは、話してみると違っていたりするものだど理解する。

ならば、私の出来ることとは一体なんなのだろう。今まで考えてきたものは一体何だったんだ。このまま彼を疑い続け、彼に迷惑をかける続けるのか。

それは、いやだ。

私にできること。それは、手を差し出してくれた人の手を取ること。合っているかどうかではなく、私自身が納得できること。

話そう。彼に  
これまでを

私を変える一歩を手に入れるために

「じゃあ、弱いと思う私がどんなことをしてきたのか、どんなことがあったのか話しても大丈夫かな」

「私もルーミアさんからできれば話を聞きたかったので。話していただけのなら嬉しいです」

「ルーミア」

「え、？」

「ルーミアって呼んでくれたらって。あんまりさん付けは慣れていないくて」

「わかった。ルーミア」

「言いたかったこと伝わったみたいで良かった」

「いや、まあなんとなくわかったから。じゃあ、お話ししてるね」  
「うん」

私は彼に言葉をかける。

誰かを信じきれない私が、誰かを信じようとする意思を持つて。

私は宵闇私自身を覆す。

## 黄金色の闇〜END〜

私は語る。全てという訳ではないものの、伝えたいこと全てを。私の身に起きた出来事。

それを彼は私の話をいつもの様に黙って、聞いていた。ただその瞳には、まるで自身の出来事のように感情を向けている。

そして私は気付く

彼から瞳から流れる一筋の光を

「… ねえ大丈夫？」

「、大丈夫だよ？」

「じゃあ何故そんな顔をずっとしてるの？」

「え、？」

「なんで泣いてるのって聞いているの」

彼の表情はキョトンとした顔をしている。いや、必死に自身の気持ちを隠そうとしていたのだろうか。

「別にそんな感情もないし、涙も… あれ？」

彼は驚いた表情で、自身の頬に付いた涙を拭き取る。感情を見せた彼の行動。それは、共感してくれること。そして、相手の気持ちを知って、分かち合おうとする彼の姿。

はたして、今まであった人の中で、感情をぶつけることを許してくれた人は私の人生に何人居たのだろうか。それだとしても、ここまでお人よしな人間はいたのか。

「本当に大丈夫、？」

「ああ、うん。今は大丈夫だから大丈夫」

「意味がわからない。話してる時にいきなり泣いたからビックリした」

「あはは、ごめん。話聞いているね」

「…うん」

もしも、もつと早くに彼が来ていれば、私や私達は人を素直に信じる心を残していたかもしれない。今を虚ろに思う私も、逃げたいと思う私も、それに耐えていている私も、結局全部私自身なんだ。

だけど、まだ信用もできない私が、彼に助けを求めるのは間違っているのではないか？

また、分からなくなってきた。

朝日が昇り、私は目を覚ました。

だけど、周りには誰もいない。懐中時計を確認すると、九時前だった。もしかすると、彼はどこかに行ってしまったのかと考えるが、この場所から遠く離れるのはこの世界を知っている彼はしないとかわれる。

ならば、彼はどこに行ったのだろうか。

私に出来るのは彼を待つ事くらいしかない。だけど、この場所には机のような背もたれのない背の低めなベンチ椅子、背の低い長机が少し置かれているだけ。他に使えるものは存在しない。

だけど、ここは私にとっては落ち着く場所。この場所があったから、私は自暴自棄になることは無かった。それが、私の友達が教えてくれた「この場所」だ。

ゆつくりと時計の針が進む。体感的に時間が経つことが分かると、外から足音が聞こえてきた。誰かが来たと考えたよりも先に彼が戻ってきたと信じて、周りを見る。

そこには少し足元が濡れ、服や袖にも水を浴びた様子の彼が長考していた。

「…玄関で何をしているの？」

「うおっ！ ・びっくりした」

「いや、さつきからずっと居たよ？」

「気付かなかったのか。」

「. . . というよりなんで足の方とか濡れてるの？」

「これは、ルーミアに川魚とかを渡せたらと思ったから。全然上手くいかなかったから残念ってことくらいかな」

「そこまでしなくても……」

「ほら、私達って昨日からなんにも食べてないし、かと言ってルーミアを起こしたくなかったから自分のやれることをつてね」

「…」

「あれ？ 黙る要素あった？」

「少し黙って」

「えー」

彼の言動は偶に良く分からない気持ちにさせる。心がモヤモヤするのだから、あまり良いものではない。だけど、気になってしまいうから私の性格は嫌だ。これは彼に対する謝罪の気持ちでも無いのだから、よくわからない。

そうだとしても、私だけ何もしないという訳にもいかない。彼の分らないことは私が手伝うとしよう。

「私は少しだけなら出来るから、教えるよ」

「それはありがたい。あとは包丁とまな板とかあったら捌けるんだけ

どね」

「それならあるけど…調理器具って呼べるのはそれくらいしかないよ？」

「まあそうみたいだね」

「ごめんなさい……」

「こんな事で謝らないで頼むから」

怒られたのか。

彼の目は子供をあやす様な目を向け、落ち着かせるようにそういった。

何かをして欲しいと言った訳でも、何かをやって欲しいと頼んだ訳でもない。彼は自分自身の意思でこれまでの事をしてきている。見返りを要求してくる訳でもなかった。

物を無理矢理押し付け、ぶんどることも彼はして来ない。それは、多分彼が優しいからなんだろう。

でも、まだ私は——受け取れきれない。

———あの後私達は外に行き、川の流れる所で魚を取り始めた。いつもはなんとも思わない光景だが、今日に関しては誰かと一緒にいる。その事実だけでも、私はほっとした気持ちになっていた。特に彼の魚の取り方は素人同然だったが、それでも頑張っている姿はとても好きだった。

そして彼は調理が得意ならしく、魚を捌く方法を知っていたようで、私のとついていた魚を素早く調理していた。

「こっちは捕まえたよ」

「OKー自分も何となくだけど捌けたから食べてみよかー」

「一応洗ったし。大丈夫？」

「元々そこまで汚くなかったし、川の水で洗ったから大丈夫だと思うけど。」

取ったものを彼の近くに置いておく。何となくとっているが、供えてあるものはとても綺麗に盛りつけを施しており、まな板と思わせるような見た目をしていた。

もしかすると、外の世界で彼は調理の技術を扱う仕事をしていたのかもしれない。私もそのうち教えてもらいたいものである。

そして、盛り付けたものをしっかりと手を合わせ

———いただきます

口に入れる。

これは

「あ、美味しい」

「塩焼きとかでも普通に美味しいけど、こんなのも食感や風味が変わっていいと思わない？」

「そう。だね」

美味しい。



いつもとは違うように感じる味。誰かの手料理なんて、もう口にしたのはいつぶりだろう。彼が作った優しさと温もりを感じることにあるもの全て、それは私にとって幸福以外の何ものでもなかった。

——心に染みる味。

「えっ、ちよっ、大丈夫？」

彼は私を見てそういった。私には何のことだか分からなく、自分の顔に手を当てた。

ああ、泣いているのか。

手が涙で濡れる。だけど、嬉しさと笑顔になりつつある。とても今の私は彼にとつて不格好なんだろう。

「う、うん。大丈夫だよ」

「でもなんか、しよっぱいね」

恥ずかしさで私は自身に出た感情を隠す。彼の目は相変わらず私を黙って見ていた。私はその目がとても恥ずかしく思い、顔をも隠す。まだまだ気持ちが追いついてはいないが、恩返ししたいという気持ちは必ずある。まだ受け取れきれないけど、いつか絶対に受け取り返してみせようと、私は思った。

——今を変えるために。

——そして、彼女らは自身の気持ちを相手に知ってもらおうと努力を重ねた。それは、今の自分をより知ってもらうためなのだろう。この現状を変えるためには話し合うしか他に方法はない。それが、前に進むための大切な1歩なのだから。

だからこそ、彼は彼女を笑わせる努力を重ねた。

だからこそ、彼女は人を信じる力に身をつけようとした。

それは、自分勝手な人間には到底できることでは無い。彼らが強い意志を持っているからこそ成し遂げられるもの。

——それこそが、今を変えようとする強い意志だ。

それでもし願いが叶うことなら、

——どうかルーミアが笑顔でありますように。

……彼女が自身を傷付けるだけでなく、彼女自身を少しでも信用出来るように願う。やらないよりやる偽善という言葉がある通り、彼女は彼女に手を伸ばし続ける。もちろん彼女だけじゃなく、手を伸ばして助けられる人は助けてあげたいと、はたして彼はそう思っているのだろうか。

ルーミア自身が過去を悔やんでも、意味は無い。そこから先の

未来をどう変えていくか、そして、どうするかを考えいく方が良い。

In the middle of difficulty.

今はそれを信じよう。

そしてあれからもう、1週間が経つ。

その間自分はルーミアと一緒に居た。二日目の夜に比べ、三日目の朝から、笑顔をよく見せてくれるようになった。誰かと久しく長々と話す事がなく、楽しんでいる様子だった。四日目と五日目は自分の外の話をしたり、ルーミアが楽しかった出来事がどんな事を教えて貰いながら過ごした。そして、六日目には常に笑顔とはまではないかなかったが、最初に比べたら圧倒的に笑顔で、楽しんでいる様子が続いていた。

最後は今現在だ。兎に角自分は自分に対しての残っている警戒心を持つている彼女の精神が落ち着くまで待つ事にする。

そうして、その日の昼。

「ねえ、貴方はこれからどうして行きたいの」

彼女は、やっぱり不思議な顔をしてその質問を投げかけてきた。自分はそのれに対して、考えていたことを返す。

「私はどうするも何も、ルーミアさんへの恩返しを続けていきたいですよう。」

「何故？」

「それが、私のしたいことだから」

「なら、その恩は返してもらってるよ」

「……生命いのちを助けてくれた恩はでかいんだ」

「それでも、私はもうこれ以上にないくらい助けてもらった。それこそ、生きてきた中でも覚えていないくらいね。だからこそ、貴方が私の為と言って傷つくのは許せないんだ」

「……………」

「それでもやるといふのなら。考えて行動する。それが貴方には、私は似合っていると思うよ」

「私は、私はルーミアを傷付け回った奴らを許せない。でも、私ができることってのはやっぱり聞いてあげることしか出来ないんだ。力があるわけでもなく、知識が豊富な訳でもない。だけど、見捨てる事だけはしたくないって思う」

「それってのは、つまり私以外の傷付ついている人を助けたいってこと？」

「できることなら、と前は言っていたかもしれない。だけど、今は絶対にそうしたい」

無理難題で、高すぎて諦めるのが普通な程の壁を、自分は超えていきたいとそう言った。後戻りなんて考えてなどいない。ただ、この狂っている世界に生きていくのなら、自分はやってみせる。

それが自分が見つけた答えなのだから。

「本当に、できることじゃ無いかもしれないよ」

「分かっています」

「殺されるかもしれないし、何よりも人里を敵に回すことにもなる。それでもやるの？」

「死ぬことが怖くないとは言わないよ。だけど、それ以上に何にもできない自分がある方がよっぽど怖いんだ」

「なら、貴方は。助けに行くんだね？」

「うん。もちろんそうする」

「……………」

今更自分の言葉を変えるつもりはない。ルーミアと一週間話して  
いて思ったのは、ルーミア自身もルーミア以外の存在もこの世界に苦  
しめられているってことだった。

自分ができることは、自分がしたいことは

——手を差し伸べ続けることだ。

あれから彼と、少しの間を過ごしていた。楽しい時間ほど経つこと  
は早く、私は彼を多少なりとも信用出来るようになっていた。

だからこそ、気になってしまう。彼の私に対する気持ちを、そうし

て声をかけた。

「貴方は、これからどうして行きたいの？」

そして、知る。彼はずっと私に恩返したいということと、私以外を助けていきたいという彼の気持ちを。能力もなく、力もない彼には到底できることではない。もう私みたいに意識を保っている存在は数える程しかいないかもしれない。それでも、この外へでつ手を差し伸べ続けたいという。

私は止める。

だけど、彼は止まろうとはしなかった。

私より強い意志で

家族を助けようとするような目をずっと向けていた。

ならば、私は。

「……………」

「私も行く」

「え、？」

「私だけ、何もしないのは嫌だ。それに、貴方だけいくと、私は心配するから」

「わかった。だけど、私はルーミアも助けたいな」

「私も、頼りにする」

「それは嬉しいよ」

彼を支えていきたい。

自分達に出来る事。それは、今のままではわからないことだらけなんだろう。

それでも、ルーミアは頼ると言ってくれた。

笑顔で、力強いその言葉には前とは比べものにならないほどの想いがこもっている。

——だから、自分も信じよう。

自分達は想いをぶつけ混じり合うように、力強く相手の手の平を叩く。これからの幸運を祈って。一緒に進むこの先の未来に希望を以って。

突き進むんだ。

昼も落ち始めた、檻樓家の空。蛍や月も見え始めている中、彼等が交わした約束のような契りは周り一面を照らす程の力を感じさせた。苦しみも、悲しみも、これから先はまだあるのだろうか。

だけど、彼らは前に進む。絶望や憎しみを超えたその先にある希望を信じて…

T o . b e . c o n t i n u e d . .

## 赤い悪魔の murder hell ①

あの檻樓屋から外に出かけて、早三十分。川の流れは山から流れてきているようだが、その前に湖に辿り着くようだ。周りは森で囲まれてはいるが、意外と隙間があるため直ぐに分かった。

ただ、ここからそこに行くまでに時間がかかるうえに、何が現れるか分からないこの世界で、無闇矢鱈に動く訳にも行かない。

——ルーミアと一緒に行動を取るのは必然的だ。

今からとりあえず、情報をしっかりと集めておきたい。もし、情報を集めるとしたら稗田阿求がいるかどうかだが、今の幻想郷を考えるとはそれは有り得なさそうだ。それは何故か。答えは勿論男尊女卑をしているからだ。そんな世界で人里に女性がいるとは考えにくい。

今のレミアやフランと接触して生き残れるかどうかは分からない。ただ、何もしない訳にも行かない。さて、どうするべきか……

「これから、どうするの?」

あんまり状況を説明せずに、外に出た。それにより、ルーミアが気になって聞いてきたのだろう。しっかりと説明すべきだった。これは自分の悪いくせだ。

「とりあえず一番近いのは紅魔館っぽそうだから、とりあえず向かってみようかなって思ってるよ」

「なるほどねー。私は最近言っていないからあんまり分からないかなあ」

「咲夜さんとか美鈴さんとか居たりしないの?」

「いやー、いるんだけど。今はどうなってるのか分からないんだよ



ねー」

「まあ、今からは流石に失礼だから夜に行く予定」

「昼間の方が安全じゃない？」

「安全だけど、第一印象は良くしたいなあって。吸血鬼だから」

「心配」

「大丈夫だと思うよ。とりあえず色々私も思い出してみなさ」

「うん。なら私もそうしてみる」

とはいえ、このままずっと悩んでいても答えは見つからない。それどころか、時間だけが過ぎるだけ。レミリアやフランの土産物を見つけて、持っていくことすらできなくなる。

よし、まずはこの空腹をどうにかしよう。それからまた考えれば良いのだ。

少年少女食事中…

とりあえず昼ご飯を食べた後、記憶を探っているとあることを思い出した。それは銀のナイフに弱い事。咲夜さんがもしこの世界に居るとしたならば、銀のナイフを扱う唯一のキャラである。そんな彼女のナイフは本当に銀だとしたら、従者に自分を殺せることを可能にしている。無論咲夜さんがそんなキャラではないのは間違いないのだが。

それだとしても、この殺伐とした世界でどんな性格なのか全く分からない状況。そんな中果たして自分は丸腰のまま紅魔館に行つて大丈夫なのだろうか。少なからずとも信用は得られると思うが、いきな

り首が飛ぶのだけは勘弁して欲しいところである。

信用を取るか安全をとるか。

自分はもう決めた。

「とりあえず、私は何も持たないで夜行くことにしたよ」

「えー… それ本当に大丈夫なの、？」

「安全も配慮したいけど、それより信じて欲しいからね」

「あまりにもお人好し過ぎると、自分が壊れるから危ないよ」

「そうなる前に止まってみせるから大丈夫」

「そう言っている人ほどなりそうなんなんだけど」

「真顔はやめて、かなり怖い」

「誰のせいだと思ってるの？」

「すみません」

「よろしい」

なんだろう、物凄くルーミアが強くなった。色々な意味で。

あれから、一応地図が無くとも、目で見えるだけのものを確認して行くことにした。あるのは北側に湖の後に紅魔館。南側に人里。東は遠くに博麗神社がらしきものが見える。西側には森が見えている。この森に関しては魔法の森ではないのだろうか。

どれくらい遠いかは分からない。ただ思ったように行く為には直線で行くしかない。だが、飛べもしない限りは獣道を通らないようにするのは無理に近いだろう。

だからと言って、空を飛べるかって言ったら自分はそんな超人でもなんでもないので飛べるわけでもなく。仕方ないからとりあえず、地図に従って皮を辿って湖に行くとしよう。そこから行けば、紅魔館に行くまでには迷わないと思われる。

とりあえずの先のことは決まった。

後は先程から問題視している（土産品）だ。果たしてどうすべきか…

「ルーミアー」

「なーにー」

「なんか決まったー?」

「何もー」

レミアアとフランのところに行くためにはルーミアと一緒にいなければならぬ。もし、一人で行くのならそれは自殺願望となら変わらないだろう。そして、門番とメイド長になんの土産も持たんまま主人と話を付けろと言うのはいささか問題しかない。

これ結構絶体絶命ではなからうか。

そうしている合間にどんどんと日が落ちて行く。先ほどまで顔を完全に出していた太陽が今では下の部分が隠れて行ってるのが分かった。月はまだ出てきてはいないが、冷え込んできているのがなんとなくわかる。

このままだとマズイ。今日行かなければ意味がない。なんとしても今日中に行きたいが…

「ねえ、ルーミア。ここから紅魔館まで歩いてどれくらいかかる?」

「え!?、えっと2時間くらいかな…?」

そうだった。田舎と一緒にそれくらいかかるのは当然だ。どうすべきか、かなり日が落ちてきている。今から向かわないと、到着したい時間に間に合うかどうか。

空を見上げ、兎に角今の自分に出来る最大限のおもてなしをする為に。

「ちよつと、お願いがあるんだけど」

「何?」

「指を噛んでくれない？」

「……え？ いきなり何……？」

「そんな引かなくても…… とりあえず血を取り出したんだ。小瓶見つけたしそれに入るくらいなの」

「え、えー」

「お願いー」

「分かったけど…… 理由は？」

「唯一の土産品としてかな。吸血鬼なら血を上げてまずハズレとかはないと思うし」

「そうかもだけど、本気？」

「本気だよ」

ルーミアは少し考え、頭を抱えつつも指の先を千切るように素早く首を横に振った。痛みは一瞬で、上手く切れていたため、少量ずつ血液が流れてくる。

自分はその血液を採取するために準備していた小瓶に流し入れていく。80mlくらいだろうか。瓶に詰めて、削った石で蓋を閉める。傷跡は袖を千切ったものを巻きつけておくとしよう。

ルーミアはあんまりいい顔はしなかったが、血は美味いと言っていた。どうやら、私の血は美味しいらしい。そうと言えども、自分でわかる事ではないのだが……

だがこれで土産物は用意が出来た。あとは迷わずに紅魔館に一直線で行けば夜中の0:00には行けることだろう。他に、なんにも無ければの話ではあるのだけど。

誰だろう。

——なんにも無ければとか言った奴は。

「うぎやあああああ!!?」

「逃げてどうするのよー!!!」

「いやいやいや!! 来すぎでしょ!?!」

「確かにー!!」

「でしょ!?! ってそんなこと言ってる場合じゃないっ! 逃げろー!!!」

まさかの妖怪を30体を引き付けて逃げている。何故こんなことになったのか。さつきまで普通に道を歩いているだけだった。それなのに、私の指を狙っているようで、先程からルーミアは見向きもせず自分だけをこれでもかという程に狙ってくる。

このままでは死ぬ(確定)

「よし! 水に飛び込むぞー!」

「なんで!?!」

「なんか、泳げなさそうだし!?!」

「変身したらどうするの!?!?!」

「知らん!」

「ええ!?!」

どんだん川の横幅が大きくなる。このまま曲がったならばそれはそれで追いつかれてしまうだろう。やるとしたら前に突っ切り泳ぎきる。それが出来れば生き残れるかもしれない。一か八か、今の時間に考える時間などない。

「飛び込めえー!!!」

勢いよく足で地面を蹴り飛ばし、水の中にダイブする。ルーミアは逆に空を飛んでいた。

「そこは飛び込もうよ…?」

「やだよ、濡れるもん」

「ええ……」

ルーミアは優雅に空を飛び、自分はずぶ濡れ。そして、水と混じっ

てないか瓶に入れた血液を確認する。ポケットをしつかりとしめ、蓋もぎゆうぎゆうにして会ったおかげで、血に混じっている様子はない。

ただ、このずぶ濡れのまま紅魔館に行くのは一体どうなんであろうか。

「とりあえず……はあはあ逃げ切れたっばいね」

「あーあ”疲れた”」

「そんなこと私に言われてもなー」

「飛んでたじゃんか」

「濡れるのはちよつと、ね？」

「まあ、とりあえず紅魔館に少し近づけただけでも良しとしますか」

「おっけー」

軽く服を絞って歩き出す。そこまで泳いでいたわけではないため、景色もあまり変わってはいないが着実に紅魔館には迎えていることだろう。

濡れたおかげで血の匂いも薄くなっているとルーミアは言っていた。多分これで次襲われることはない。油断は禁物なのだが。

前に進んでいると、星や月がハッキリと見える場所があった。何時もの場所は木が生い茂っていた場所ということもあり、視覚の半分以上少ない隙間からしか見えてはいなかったが、今回は全体を見渡せる程の場所。これが見れただけでも現代なら料金を取れるだろう。

「綺麗……だあね」

「んー、確かに綺麗だけど。こういう景色も見れないんだっつけ？」

「見れる場所がかなり限られてくるって感じかな」

「前と今ならどつちが綺麗？」

「断然こつちかな」

「ふふふつ、なんか嬉しいね」

「月も綺麗だし、満点！」

「そりゃ、良かったよー」

他愛のない会話をする。月夜の晩、十六夜の下にてルーミアとの会話。昔の自分ならこんな可愛い子と話せることを知ったらどんな反

応をするんだらうか。

今と昔で変わってる気もしないが、変わっているのならまた変わるのだから。ルーミアも変わった、自分にだって変わることが出来るはずだ。

それを今考えるべきかどうかは別として…

「まあ！ とりあえず、前に進みますか」

「止まっちゃったしねー」

「この景色が悪いんだけどね？」

「なんでー？」

「綺麗だから」

「はいはい、そうですかー」

「なんで少しムスツとするん」

「えーなんとなくー」

「すごく、気になるんだけどっ」

「ひーみーっ」

「道具？」

「え？ それなんのネタなの？」

「あ、そりゃ知らないか」

「??？」

「外の知識だね」

「へー」

ネタを挟みつつ、暗闇の中を歩いていく。明かりは月の光以外は見つかからない。ただ同じ光景が続ぎ、真つ暗なだけだ。紅魔館もまだまだ先の方にしか見えないため、ゆっくりと進んでいくしかないのだが。

時間を確認する。

まだ、23:20辺りで、0:00にはまだ40分程時間がある。それまでに付くのかは分からないものではあるが、距離的にそれだけの時間があれば間に合うと思われる。

と、考えていても進むしか道はないのだが。

少年少女移動中……

あれから三十分。ずっと時間が過ぎてしまわなにか心配ではあったが、少し早歩きを入れて目の前まで近づくことが出来た。

門番は紅美鈴。

彼女がいると思われる場所、そこへと視線を向ける。

「いる、？」

「いや、分かんないや」

暗闇に耐性を持っているルーミアでさえ、門の近くに彼女は居ないという。

運悪く中にでも居るのだろうか。

「でも、気配はないよ」

「そうか」

居ないと分かってそのまま中に入れば咲夜さんに見つかって即死。そんなことも普通にありえる話だ。だから何としてでも誰かに中に入る権限を貰わなければならない。

不法侵入で命を落とすのだけは勘弁である。

「うーん、とりあえずもんの近くまで行こっか」

「そうだねー……」

仕方ないと、前に足を進めようとする。だけど、

——何故、身体が動かない？



全く動かない。まるで、蛇に睨みつけられたカエルと同じだ。そして冷や汗が止まらない。

「そこに居る貴方達は、一体何をしているのですか？」

その声がゆっくりと前から近付いてくる。暗闇から顔を見せたのは、先程から自分達が探している門番。

紅美鈴だ

「不法侵入、をしようとしても？」

「あ、いや」

「答えなさい」

恐怖で体全身が竦む。ルーミアの顔も横目で確認するが、引きつっているようだ。当然だろう、目の前に銃を突きつけられてると変わらないのだから。

このままでは本当に死ぬ。

「こ、れから、レミアリアさんにあ、会いたくて」

掠れた声で、そう言葉を伝える。

「そうですか、分かりました」

「ごほっ、ごほごほっ……」

体全身に自由が戻り、先程までの反発が襲い掛かる。ただ、本当にこれで信じて貰えるとは思っていなかった。

まだまだ質問をされるかと思っていたが、彼女の気が変わったのか。それとも真実を見抜けてもらったのかは定かではない。今はそんなことよりも、先に説明をしよう……

怖かった……

「……なるほど。では、本当に貴方達はお嬢様に？」

「はい…… そうなんです」

「……………」

沈黙の最中、彼女は私自身の顔をじっと見つめ、深く考え込んでる。ルーミアにも視線を向けている様だったが、すぐに自分にへと視線を戻した。

「えつと...?」

「少し質問があるのですが、答えてくれますか?」

「あつ、はい」

「... 貴方は何故妖怪をみても、いや、私達を見ても恐怖心を抱いていないのですか?」

一体どういふことなんだろう。とは思ったものの、自分はこの世界で悪く言えば美的感覚が真逆である故に、ルーミアや美鈴さんの顔を見ても全く恐怖は外見だけを見たら絶対に抱かない。むしろ自分のいた世界ならば、美人であると考えるべきだろう。それでも、自分は妖怪という存在を知っているが、見た目から恐怖心を抱くことは無い。それに自分は顔がどうかで人格を否定するつもりは毛頭ないのだから。

つまりは自分はこの世界では異端児。

というより、恐怖心を抱かないのは妖怪という存在そのものを超えて、自分自身が勝手に相手を信用してるからによるものなのだが。

「答えが間違っていたらすいませんが、私は自分に身勝手な危害を加える存在で、人徳的なものを全く理解できない愚か者であるならば、私は恐怖心を抱くでしょう」

「だからこそ、私は断言できます。貴女に恐怖心を抱くことは決してないって」

「面白い回答を致しますね」

「そうですね... なんと言うか、普通に美鈴さんを私は信用できませんよ」

「私も、あんまり話して無かったけど美鈴さんは大丈夫だって信じてる」

沈黙状態であったルーミアが口を開く。ルーミアと彼女があまり話してなかったのは意外ではあったが、ルーミアは彼女自身を信用していたようだ。

彼女は数十秒考え、呆れたような顔でこちらに視線を戻した。

「... はあ、貴方達を完全とは言いませんが、信用するとしましょう。後これ以上はお嬢様達が決めることですので」

「ありがとうございます。あと、土産物としてこちらを」

「今は結構です。私は匂いで分かりますし、預けるなら私よりも咲夜さんに渡した方がよろしいでしょうから」

「分かりました」

「では少し失礼します」

彼女はそう言つて館の中へと入つていった。

「ねえ、ルーミア」

「何、？」

「私も頑張つてはみるけど、これって結構大変… だよね」

「何が、大変？」

「この、館の住人を変えるのは」

「まあ、ね。だけどやるんでしょ？」

「もちろん」

「なら、頑張るしかないよ」

「そうだね」

決心は前からついていた。だけど、この館の住人を見て自分は不安になったのだろう。

それでも、自分はやると決めた。手を差し伸べる相手がいるのなら、前を向こうと言える相手がいるのなら、自分はそうしたい。最終的に変わるのには相手次第だが、自分に出来ることを見つけたのだから、私はやりたいと願う。

——今を頑張るんだ。

To be continued...

## 赤い悪魔の murder Heil ②

あれから二十分程だろうか、特に何をするともなく、自分達は門の外で待つことにした。夜の空気は澄んでいて、自然が豊かなおかげで、都会特有のツンとするような匂いは一切なかった。

ルーミアは少し浮き、こつち顔を少し見せながら周りを見渡している。やったとしても、この周りに妖怪は見当たらないから意味があるのかは分からないが。

「来ないねー」

「仕方ないよ。ゆっくり待つしかないさ」

「そうだけどきー」

時間を止められる彼女が顔を見せないというのは彼女の性格上、珍しいことなのではないだろうか。彼女の性格が私の知っている性格であるならば、嫌であるとしても、多少の声かけることを彼女はするのではないか。

それでも、この世界は狂っているから何も無いってことは無いのだろうか。

「さてと、待つしかない訳なんだけど」

「一応、咲夜さんってどんな感じの人…？」

「んー、私もそこまで知ってるわけじゃないからね」

「なんとかしなければならなあ」

知らない訳が無い。

元の世界で自分はかなり見てきたから、分からないってのはない。逆に知っているから、敵わないとも知っている。

だからもしも、咲夜さんに挑もうものなら死ぬことになるのは間違いないだろう。

——自分が死んだということすら分からずに。

ガチャリと音が鳴る。音をたてた方向へと目をやるとそこにはメイド姿と女性と先程にみたチャイナ服を来た美鈴がこちらに向けて歩いてきていた。

メイド姿の女性となると咲夜しかいない。他にも妖精メイドなどがいれば話は別だが、周りには見当たらないのと羽根が見えないため多分違うと言えるだろう。

考えているとかなり近くまで彼女たちは来ていた。ルーミアも浮遊から地面に足をつけ、彼女達がくるのを待っている。

「はじめまして、私はこの屋敷のメイド長を務めさせていただきます」  
十六夜 咲夜と申します。以降お見知りおきを」

「あ、はい。はじめまして私は希楽 與家といます。よろしくお願  
いします」

彼女は自分に会釈をしながら挨拶をする。自分も彼女に向けて挨拶を返した。これだけなら何も変わった様子はない。

「ただ、何故か美鈴さんは表情は余り変わらないものの、彼女に対してかなり警戒をしているように思えた。何か彼女が持っているものとしたらナイフだが、それで仮に自分に攻撃を仕掛けようとしているのなら話は着く。」

あとは、彼女自身を男である自分を見て発狂でもしないかと警戒しているのか。

自分も警戒は怠らぬようにしておくでしょう。

「では、お嬢様に会いたいということでお間違いはないでしょうか？」

「はい。レミリアさんに会って話したいことがあるのです」

「それはこちらに言伝として伝えるのも、厳しいということ間違いありませんね？」

警戒をしているのはあつちである事を忘れていた。自分が思っているよりも男性を主の元に連れていくというのはこれほどのものな

のか。確かに、わざわざ夜に手土産を持って、会わせろと言ってきているから警戒もされても仕方ないとは思ってはいたが。これでは中に入ることも難しくなりそうだ。

でも、やはり仲良くしていくためにはレミリアと話をしたい。仲良くしていききたいんだ。それを咲夜や美鈴に言われても止められるだけ。

それだけは避けなければならない。

「そうですね。私にも話をしたいことがあるので、すぐに終わらせませう」

「そうですね、お嬢様は許可しております。失礼は後ほど詫びをお持ち致しますので、先にお客様として貴方様を迎え入れさせていただきますね」

「はい。ありがとうございます」

やっぱり、レミリアは自分が来ることを知っているのだろうか。自分がどのような理由でできたことも知っているのなら、話が早いのだが。

聞いてみるのもありなのか？

↓ 聞く？

↓ 聞かない？

やっぱりやめておくとしよう。

これ以上の警戒を与えても仕方ない。第1自分が外の世界から来たということ事態信じてもらえるかどうか不明である。もしも、信じてもらえなかった場合には自分は死ぬだろう。

だからこそ1回きりの勝負だ。

だからこそ気づいて欲しい。本心をレミリア・スカーレットへ知らせるために。

「では、着いてきていただけますか」

「わかりました」

ルーミアは後ろから咲夜に対して、とても不思議そうな顔を向けて、彼女について行く。彼女はこちらに一言も話すことなく、前を歩いていった。

話すことを嫌がってるのか、そう出ないのかは分からないが、多分警戒から信用なんてこれっぽっちもしていない彼女にとってはこの対応こそ普通なのだろう。

むしろ、自分達に危害を加えてないだけで運がいいのかも知れない。

「つきました。では私はお嬢様にお声をかけてきます」

そう言っただけで彼女は時間を止めたのか、目の前から消えていた。というより、それならここまで来る必要があったのかと少々疑問に思うことはあったが、咲夜やレミアは考えることがあるのだろうかと思ひ、そのままルーミアと一緒に待つことにする。

「かなり、緊張してる」

「まあ、與家はこの家きたことないような感じするもんね」

「おいこらそれどういことだ」

「えへ」

ルーミアは少し口角を上げこちらを茶化す。赤と黒の色が入り交じったこの屋敷は確かに自分のような人間には恐怖心を抱くように作られてるのかもしれないとルーミアは言う。実際のところ確かに恐怖心を抱いているのは間違いない。ルーミアと一緒にいるから多少の軽減はあるのかもしれないが、1人ならばさまよっていてもおかしくないだろう。

だから、今の自分は今回の件で改めて運が良かったのだと心の底から感じた。

「では、お嬢様が中にと」

「わかりました」

「私について行っているの?」

「ルーミアは待っていると、お嬢様は仰ってありました」

「んー、了解」

「じゃあ、行ってくるね」

「うん」

とくに何かある訳ないとは思いますが、それでもここまで来るとやはりどうか足がすくんでしまっていた。それを無理やり前へと進ませる。

そして、扉の前で深呼吸を繰り返し、ドアに手を伸ばし2回程ノックする

コンコン

「どうぞ」

部屋の中から少女で、けれど力強さのある声の持ち主が中に入れてくれることを許可してくれた。

自分は、最低限のマナーで失礼のないようにしなければ。

「失礼します」

中に入るとそこには所々ボロボロで、傷の縫い目のようなものが手首に付いている幼き少女、それが今話しているレミリア・スカーレット本人なのだ分かった。

ルーミアは何かあったら助けに行くと先程教えてくれた。外にいた方が自分が安全だからと言って、咲夜と残ると言っていた。ただ、確かに咲夜は危ないかもしれない。あの表情と目付きだと何をしでかすかなど分からない。

レミリアはそれを知っているのだろうか。

「随分と丁寧に入ってくださいるんですね」

「随分と、丁寧とは、？」

「貴方がどうだかは分からないけど、少なくとも私たちに命令する奴もいるのよ」

「私はそんなことはしませんよ、あとお名前はレミリアさんで大丈夫ですか？」

「ええ、大丈夫。これからまだまだ気になるしというより貴方を見てとても興味深く感じたわ」

「有難いです。これから話していきたいという思いと、私の今最大限出来るお土産となります」



渡したのは自分がルーミアに頼み作ってくれた、自分の血だ。栄養がとかは分からないが喜んでくれたらとは思いますが、果たしてどうなのだろう。

仲良くなれるかどうかは別として、今渡せるものは渡しておくとして、ようと思った。

「これは、さつきも見た貴方の血ね？」

「そうです、喜んで頂けたら嬉しい限りです」

「……そうね。もちろん有難くいただくことにするわ

……貴方の身体を、ね」

一瞬で空気が凍る。多分、殺意を向けられているのだろう。彼の身体全てが動くことが出来ていないのだから。

恐怖心が増大するだけでなく、意識が飛びそうなほどの殺意。この世界へ来てからこんなことしか経験していない。不幸と嘆くのもありだと思う。

けれど、その殺意にはまだ黒く染まりきってない。まだ光があると、なんとなくでもそんな気がした。

「貴女は、私にその気持ちや感情をぶつけて楽になるのですか？」

「それは、一体どういうこと？」

口調が変わる。戦闘準備は完了している。

「つまりは、私を殺して貴女は楽になるのですかと聞いてるんです」

「ああ、楽になるわね。目の前から異物が消えるのだから」

「そうですか、手も足も出ないような弱者を虐めて楽しむのですね」

「何を言っている？ お前達人間の男は戦闘狂しかいないだろうが」

自分の運命を見たわけではないのだろう。もう少し話を出来ると思っていた自分は期待しすぎていたのかもしれない。しかし、この現状はどうするか、自分は戦闘など出来るはずもない。少しだけ東方の知識のあるオタクなだけだ。

「だが、わざわざ結界の外に出て身を晒すとはいい度胸だな」

結果、？ 外、？ なんのことを言っているんだ。何を指しているのか、全然分からない。幻想郷の博麗大結界のことなのか？ であ

れば、外に出てきたとは一体なんなのだろう。

「すみませんね、私にも分からないんですよ。外の世界から来たばかりで、助けを求めているだけなんです」

あくまで自分は死にに来た訳では無い。確かに目的はあるが、それだけを固執してはならない。今は信用を得る事、それだけに集中しなくては。

「フン、だからと言って貴方は私を騙すのでしよう？ それを分かりきっていて、話を通じるとでも？」

どこまで、信用無くしてるんだこの世界の野郎共は。力を手に入れた男で悪いやつが2人もいれば街なども滅ぼせるというのに、そんな奴がこの世界に鎮座し、自分の欲望の糧としている。やっていること全てが、むちやくちやで、ワガママで、呆れる程に馬鹿なやつらだ。「私には戦う力がなくて、それでいいとは思ってないんですよ。それだからこそ、今の貴方に私が勝つ確率なんてものは0に等しい。そんな勝負をして貴女はたのしいのですか」

「貴方、今更何を言っているのかしら？ 私達を散々傷つけておいて、自身が弱くなったら弱いものをいじめをするな？ ふざけてるの」「私はそんなことをしてはいない。それを貴女は見れるはず。だろう？」「運命を操る程度の能力」者さん

レミリアはそれを聞くと、少し動揺したのか、目が標準に合わさっていない。それに、息が荒くなったように感じた。

「どこで知った」

「だから、はあ。それは今からお話します。そのために来たのですから」

「嘘は、付いていないわよね」

「嘘を着く理由がないからしませんよ」

「……………」

レミリアは少し考えたあとに、殺気を止め、椅子に座る。先に伝えて良かったのかは分からないが、これから先話すことになるのだから変わらないのかもしれない。

「分かった。今は信じることにするわ」

妖怪も人間も自身が知らない赤の他人が自身の情報を知っているなど有名人でもない限りありえない。それに対して、男という存在が彼女の恐怖心に掛け合わされた。今のレミリアは死に面していると思っているのだろう。

そんなことをするつもりは毛頭ない。そして今はとりあえず、生きていてよかったと思うことにしよう。

まだまだ、先は長いからだから。

To be continued.

## 赤い悪魔の murder Heil ③

今自分は、自身にこれまで起きてきた事柄を、嘘偽りなくとある人物に話している。その人物というのが、この赤い館の主である「レミア・スカーレット」本人だ。

彼女は、自分の話の話を傾けることを約束した。だから、自分は彼女から信頼を勝ち取る為、本来ならあまり話さない事まで話している。それは、幻想郷の外である自分がいた世界のことの記憶から、こちら側に来てまでの覚えていること全てだ。

だが、やっぱり自分は信じて貰えていない。

話している最中、ずっと恐怖されているように自分は感じていた。それは、あからさまに目を逸らしたり、言葉が籠ってしまっただのか上手く聞き取れない部分が多数あったりしたからだ。

—— やっぱり、難しい。

人から信頼を得ることが、簡単な話ではないのは分かっているつもりだった。それも、見ず知らずの人間の男。突然現れては、レミア・スカーレットの情報を、他人には知られてはいない彼女自身の情報を一方的に知っているかのように話す。

しかも、自らの事を話すからそちらも話せと言わんばかりに、自身の縄張りへと入って来て語り始めたのだから。

そんなこと、誰だって少しでも考えたら恐怖する事だった。実際、我々がその行為を行われて、不快感を抱かないと言われたら嘘にならないか？

確かにそういった感情や主観を抱かない人もいるだろうが、特に彼女らはそういった事柄に置いては酷く恐怖を抱く。それは、ルーミアの件で良く分かっているつもりだった。それなのに、自分はそこまで考えが及んでいなかった。

いや、考えてはいたのかもしれない。けれど、自分は「そんなことなかったのだと認めざるを得ない。その点において自分とはとことん甘

後悔先に立たず。とは、この事なのだろう。

「…ふむ。なるほどね、じゃあ貴方は外来人と言って、この幻想郷の元々の住民では無かったのね」

「そして、私の事を知っているのは噂話とかではなく『外の人間だから』ということの間違いはないかしら？」

「はい。間違いはありません。私が貴方の事を知っていたのは外で貴方の名前と存在が描かれたモノを見ていたからです」

彼女は、座っている1人用のソファアームの上で体重を背もたれに預ける。そして、徐ろに交差するよう左足を上に組み、頭を捻って考え始めた。目も一緒にゆっくりと閉じて、多分だが思考を巡らせているのだろう。

自分自身も結構長く、いや本当に長く話していたような気がする。自分も思考の整理をしようか…

そしてこれ以上、自分が彼女に話せることは無い。あとの事は彼女に信じて貰えるかどうかで、この先の全てが変わってしまう。

自分に出来ることは、もう全てやった。最後は彼女の言葉を待つのみ、それくらいしか出来ることはない。

しかし、本当に時間というのはときに… ゆっくりと進む。

それは、時間感覚が無くなるといった表現があっているのか、それともズレてしまったという方が正しいのかは分からないが、何分が何十分も経ったかのように感じてくる。相変わらず彼女は、目を瞑って考えたまま言葉を発さない。

そうしていると、ぽつりぽつりと雨音が鳴り始めた。本当にこのタイミングでの雨は、良いものでは無い気がする。考え方にもよるのには確かだが、静かな空間で自分の考え方を変えさせられるような気がするからだ。

雨が降る音がする窓の外。その音に気を取られては、思考を巡らせていたものの止まってしまう。雨で整理していたものを断ち切られたせいなのか、判断力が徐々に鈍くなっていくのを感じた。

ああ… 憂鬱になる。

そうやって考えていると、自分はどうかやら俯いて居たのか、目を開けると紅い色の絨毯が映りこむ。

どうやら雨は、どんとどんと酷くなっている。そして、何よりも雷の音が鳴り始めた。

ピカッと雷が光る度に、彼女の姿が映し出されている。そんな彼女の顔はまだ、目を閉じて難しい表情をこちらへと向けていた。

まだ、この時間が続くのかと思っていると。

「ねえ… 質問があるのだけれど」

声をかけられた。

「はい。なんででしょうか…？」

「貴方は、多分ここまで順調にやっているつもりだった。ルーミアを引き連れて、夜にわざわざ血を届けた。そうこの私から信頼を得る為に。他人の想いを勝手に背負い込んで身勝手に動きだした… 間違っていないわね？」

「… はい。間違っていないです」

ルーミアに対して、自分が言った言葉は伝えたかった事は本当だし、本物だ。手を差し伸べ続けて、傷付けられている人を見過ごすなんてことはしたくない。だからこそ、自分はこうやって危険だと知っていても全てを伝えてきた。他に間違いは、無いと思う。

「やっぱり、貴方って結構なバカなのかしら？」

「… え？ はい？」

「貴方は、確かに誠実な行いをしたわ。誰からも信頼を得ようとしたならば、嘘偽りで塗り固められた言葉を使ってボロを出すよりも、真実を伝えた方がいい。それはなんなら、間違っていないわね」

「それが、一体どうかしたんですか？」

「はあ… けれどね。貴方の言ってる事をこちら側が信じるか信じないかはまた別の話、貴方がどれだけ誠実な対応をしても話の受け取り手側が悪かったら意味が無いのよ」

「はい」

「つまり、貴方がやったことは戦略としては最悪。賭けにしても、余りにも部が悪すぎるもの。館の主である私に信じられたいと思うのは結構、だけど、それに対して時間をかけたわけでもなければ、全て私に任せきりな所もあるわ。例えば、私の能力を知っているから私に

『運命』を見てもらえればいい？。そんなの貴方が勝手に思い込んで  
いるって言ってしまうえば全部終わりなのよ」

「それに、馬鹿正直に伝えて相手に不信感や、思い上がらせて貴方に生  
命の危機を与える可能性があることは考えなかったのかしら？」

「貴方は『人が優しすぎる』のよ。本当にバカみたいに、相手を信じて  
いた。そして、メリットが私こと『レミア・スカーレット』にそこ  
まで無いことや、自分の危機の事をしつかりと考えていなかった」  
「一言で言ってしまうえば『愚策』だわ」

強く圧をかけるように、彼女はそう言った。自分は、その言われた  
内容にただただ黙ることしか出来なかった。ほぼ全てを、今までやっ  
てきた事を否定されているというのに。多分、心の何処か納得してし  
まったのだろう。だから、声を発することが出来ないのだ。

実際、間違っではないんだろう。

自分は勢いに任せて、確かにここまで来た所があった。もしかした  
ら、自分は自分の知識だけを信じていたのかもしれない。『レミア・  
スカーレット』という人物は、運命を操れる。だから、自分を信じて  
貰えると思い込んで。見てもらえれば、分かってもらえすれば、力を  
貸してもらえると。

甘いとか、そういう以前の問題だったのかもしれない。自分こそ、  
本当に彼女を信じていたのか。それすらも怪しくなってきたという自  
分がいた。

だけど、同時に多少の憤りを感じている自分もいる。そこまで言わ  
なくても、良いんじゃないかと。

自分が相手の気持ちを先越して、自分勝手な行動をしたのは分かっ  
ている。だが、それも助けたい一心でという気持ちでやっているのに  
何故なんだって。

固く握りこぶしを作る。それは、憤りも勿論あったが、悔しくて仕  
方ない気持ちもあった。自分は、相手に響かせる大層な言葉なんて  
持っていない。話していたのだから、その間の言葉だとするとわから  
なくはないが、その様な反応はなかった。それに、どれかなんて自分  
は分かかってない。

この先、どうすれば良いのだろうか。

ずっと黙って、彼女の話聞くことなんて無理だろう。しかし、ピリピリとした酷く重苦しく、荒んだ空気が流れている。言葉一つ捻り出す、その行為をするのに勇気が必要な程の雰囲気。そんな状況、慣れていない自分が耐え切れるはずがなかった。

冷や汗が止まらない。ずっと考えてはいるものの、纏まらない。何か言葉を返さなきゃいけないというのに、その言葉が見つからなかった。

落ち着け。深呼吸して落ち着くんだ。

活路を見い出せ。それができれば、この状況から覆れるかもしれない。

「私は、そう言われたとしてもこの行為を辞めるつもりはありません」  
「… 何故？ さっきも言った通り、私が信じなければ終わりなのわかっていいのかしら」

「確かに、信じられていなければ私は終わりです。殺されているかもしれない」

「ええ、そうね」

自分は深く息を吐く。落ち着かせて、思考を全力で巡らせるために。

「ですが、本当にもし何も信じられていないのであれば、私はもう死んでいたはずなんです。それこそ、話している途中に殺されているかもしれない」

「…」

「レミリア・スカーレットさん。紅魔館の主である貴方なら、すぐに排除出来るほどの力を持つていたはずですよ。私のような非力な人間なんて、いとも簡単に殺せる筈ですよ。一瞬で、肉や骨を塵にできるほどの」

「つまり、貴方は何が言いたいのかしら？」

「すみません。端的に言えば『何故』忠告をしてくれたんですか？ 私が本当に信用に値する人間ではないのなら、この先の心配なんて必要ありませんよね。死ぬ前の人間に、心配なんて必要なのでしょうか」



「疑問に思っ居たんです。お人好しだと言ってくれた時、私は怒られていて感じていた。もし、本当に私を殺すのならもつと違う感情が湧き出ているはずです。憎しみや、嫌悪と呼ばれる黒い感情」

「でも、あの時に感じたのは嫌な感じでは無く、別の感情でした。そう、優しさを感じていたんです。だから、疑問に思っていました」

「最終的に、私が思い付いたある答え。もしかして本当は『信じてくれているんじゃないんですか?』いや、正確には『心を許してくれているんじゃないんでしょうか?』」

自分は早口になりながらも、考えを述べていく。考えを述べるとはいえ、相手を煽っているようになってしまっていた。咄嗟に言われた事を対処するのに慣れていないとはいったものの、これは最早賭けである。

もしも負ければ、命は無い。自分にとつて最後になるかもしれない思い切った行動。レミリア・スカーレットに言われ、自分なりに考えた発言を伝える。

… お願いだ。想いよ、届いてくれ。

彼女は難しい顔を浮かべ、指を机に対してゆっくりとテンポよく小突いていく。少しその行動を続けたかと思うと、彼女はソファから立ち上がり、カーテンのある大きな窓まで歩いていった。

自分は、それについて行く。彼女がずっと窓の外を眺めていると、こちらに振り返り口を開いて話し始めた。

「… 考えたわね。私が本当に信じていなかったら、とつくのとうに殺しているわ」

彼女は窓に手を当てて、こちら側にゆっくりと振り替える。その目は、しっかりと自分に向けられていた。

「もしも、中途半端に信じていたのだとしても、私は館にすら入れてないでしょうね。あと、私は中途半端に都合の良い部分だけ信じる外道ではない。レミリア・スカーレットの名が穢れてしまうもの」

紅く、鋭い眼光。けれど、その目に映っているのは自分という存在ではなく、違う誰かを見ているようにも感じる虚ろな目。優しく、悲しげを残した表情だった。

「まあ…でも及第点といったところかしらね」

彼女も、ふうとため息をつく。そして、こちら側に近付いてきた。先程と同じような距離まで近付くと、彼女は自分に対して目を見据えては話を続ける。

「一つだけ、警告をしてあげる。貴方は、人を疑うことを忘れては行けない。この幻想郷にいるなら尚更。聞くか聞かないかは別だけれどね」

あの時、憤りを感じていたのは、自分の焦りだったのだろう。思考して口に出してやつと自分は、彼女の言葉の意味を理解した。

諦められていなかった。彼女は、最後まで話を聞いてくれていたのだ。待っていて貰えていたのかは分からないが、自分は彼女に対して感謝の思いしか湧かなかつた。先程までの、憤りはどこにも無い。

「ありがとうございます。話を聞いてくださって、そして、煽るような言い方をして申し訳ございません」

「別にいいわよ。けれど、ええ…私はまだ貴方を信じきっていない。だから、私は一つ貴方に提案を持ちかけることにしたわ」

不敵な笑みを浮かべ、彼女は自身の手を胸に当てる。

「それは、一体…？」

突然の笑みに困惑し、自分は彼女に質問を問いかけた。何をやるというのだろうか。

「私、レミリア・スカーレットと希楽與家という人間と契りを交わす。即ち…」

『悪魔との契約よ』

To be continued…